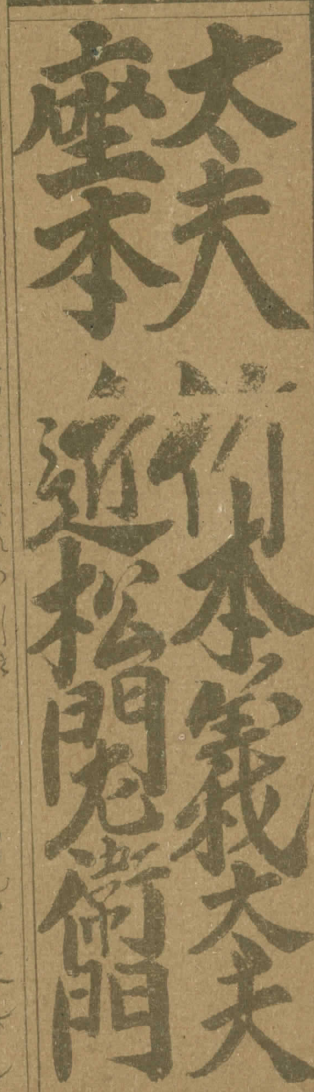




傾城阿波鳴門

又切

[illegible]

竹

第二
真

第六

真合

第十

竹 新 氣 方 丈
竹 新 氣 方 丈
竹 新 氣 方 丈

二味線

[illegible]

近松會雜記
卷六



會

本會事業たる近松翁墳の築保存並に文庫建設に着手し彌々其の認可を得て左記規程により寄附金を募集す

●募集金處分規程

- 一 寄附金は壹圓以上とす
- 一 寄附金は寄附者の指定せられたる費目に充つ
- 一 寄附金は本會々計監督渡邊庄助監督の下に大阪市東區今橋合名會社増田銀行に預け入るゝこと
- 一 金額拾圓以上の寄附者は氏名を石に刻すること
- 一 金額拾圓以内の寄附者は本會芳名錄に記し文庫に永遠備付くること
- 一 寄附金は募集人に於て申込書のみを受取り現金は更に渡邊會計監督より徵集す
- 一 寄附者は本會開設の近松文庫講筵會、演藝會等に無料觀覽を爲すことを得
- 一 寄附者の氏名は本誌上に廣告す
- 一 墳墓玉垣に署名する大小の柱數及び金額左の如し
 - 一 玉垣大柱 一本 金拾五圓 百五十本
 - 一 同 小柱 一本 金拾圓 三百八十本

右廣告候也

近松會事務所

近松會雜誌題詞

邦語能文屬阿誰近松院本

世皆推裴劍後勁傳奇筆

泣鬼神今絶妙詞

八十翁周峰公長



會

本會事業たる近松翁墳墓の築保存並に文庫建設に着手し彌々其の認可を得て左記規程により寄附金を募集す

●募集金處分規程

- 一 寄附金は壹圓以上とす
- 一 寄附金は寄附者の指定せられたる費目に充つ
- 一 寄附金は本會々計監督渡邊庄助監督の下に大阪市東區今福合名會社増田銀行に預けらるゝこと
- 一 金額拾圓以上の寄附者は氏名を石に刻すること
- 一 金額拾圓以内の寄附者は本會芳名錄に記し文庫に永遠備付くること
- 一 寄附金は墓主人に於て希望のみを受取り現金は更に渡邊會計監督より徴集す
- 一 寄附者は本會開設の近松文庫建築費、墓石等に無料獻金を爲すことを得
- 一 寄附者の氏名は本誌上に掲げす
- 一 墳墓玉垣に署名する大小の柱數及び金額左の如し

一 玉垣大柱 一本	金拾五圓	百五十本
一同 小柱 一本	金拾圓	三百八十本

近松會事務所

近松會雜誌題詞

邦語能文屬阿誰近松院本

世皆推裴劍後勁傳奇筆

泣鬼神兮絕妙詞

八十翁周峰山長

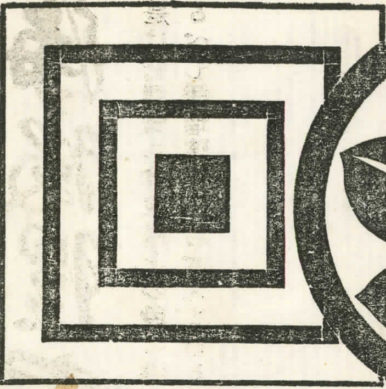


七種繁昌我馬上の段の稽古本にて市村座役者附にも見わたる太夫元市村竹之丞なり市川團十郎は元祖團十郎なり

いづれがどなた

あまのりやふじや

市村座



上

馬より後



浄瑠璃市村若太夫元市村竹之丞なり市川團十郎は元祖團十郎なり

是は七種繁昌我馬上の段の稽古本にて市村座役者附にも見わたる太夫元市村竹之丞なり市川團十郎は元祖團十郎なり

(牟藝古雅志所載)

近松會雜誌第六號目次

● 題 詞

七草會我馬上稽古本表紙(木版)

● 口 繪

福原周峯翁(寫真版)

● 談 話

近松を論じ藝苑の諸子に及ぶ(承前)……………(一) 緒方博士

● 傳 記

六代目染太夫自傳(つゞき)……………(四) 竹本叶太夫(寄)

上村源之丞の事歴(二)……………(六) 引田源之丞

● 松 葉 籠

巢林子墳墓考證(三)……………(七) 小野利教

近松曲稽古日記(一)……………(九) 東京・細川鶴聲

鬼もわんく……………(三) 小野 棣華

● 古 錦 囊

鸚鵡が袖の序……………(三) 故 竹本筑後様

反古しらべ

近松翁書翰……………(一八)

淨瑠璃絶句……………(一七)

同 語呂合……………(一〇) 小野稻洲(寄)

● 詞 の 花

詩：橋本海關・歌：岩田宗春

● 質 疑

三題

● 地 方 通 信

岡山だより

松の雪……………(三) 三 三 化 生

● 時 報

○仁丹別荘の催○御前淨瑠璃○上村源之丞一座○越路の雁信○
京都の劇界○神戸の鶯集會○姫路の溫習會○遊廓新年のお座附

● 會 員 消 息

● 會 告 及 廣 告

● 附 錄

成相靈驗記(惡婆お源内の段)

安宅關勘進帳講義(第二回)

香川蓬洲
青瑠璃漢

近松會雜誌 (第六號)

三

話

近松を論じ藝林の諸子に及ぶ

(承前)

緒方相山

夫れ淨瑠璃が日本特有の聲樂なるが故に、日本一の太夫は、即ち世界一の太夫にして、世界一の太夫たらん者、亦容易に出づべからず。近松出で、以來二百餘年間、吾輩の詮索せる所に依れば、唯一の竹本筑後椽あるのみ。而して此一人前後に比儔なき筑後は果して如何なる人に就き、將た如何なる天稟と幾何の苦心研究とを以てして彼の境に至りしや否や、彼の初め理太夫に就て手解きを爲したる當時は、純然たる素人稽古にして、自分亦自ら素人藝として左迄深く探らず、然れども漸くにして其真諦を會得するや、翻然として苦心研究を重ね、即ち自ら足らざるを知つて、宇治加賀椽に就き、又井上播磨椽に之き、能く其長短を試み、去つて遂に折衷の一旗幟を樹て、淨瑠璃界を統一し、以て當代を睥睨したり。即ち彼れの天稟と苦心研究とに待ちし事勿論なりと雖も、また一面より之を觀る時は、彼を教養して相扞格せざりし理太夫、加賀椽、播磨椽等の廣き襟懷を多とせざる可からず、名器眞に私すべからず、彼等は彼の天稟、其名器たるを知つて、互に之を教養して去就を制せざりし、殊勝なる心意は、一條鋼鐵の

如く、移して彼の心裏に置かれ、百鍊千磨以て後代に垂示するの泉源となれり。即ち當時彼の竹本座に據りて、豊竹座に臨むや、所謂商賈敵を以て之に接せず、却て同病相憐むの情を以て追隨角逐し、將た名器を廣く求むるの心を以て子弟を扶掖誘導したる事、猶理太夫、加賀椽、播磨椽等の自分に接したる態度心掛の如く、毫も門戸城壁を設けざりしなり、豈憚ならずとせんや。否名人たるべき者、將た其牛耳を執るべき者爾かせざる可けんや、然るを如何せん時代風潮は暴進の人心を荒涼ならしめ、現今に至りて益々甚だしきが如く、文樂座の堀江座に臨むや猶仇敵の如くにして、堀江座の文樂座に對するや恰かも求むる處あるが如し、素より座主席亭の生存競争に司配せられ、全然其渦中を脱すべからずと雖も、苟くも藝術の神聖なるを自覺せば、漫然其鼻息をのみ伺ふに及ばざるべし。然れども墮落壞亂の今日に於て、斯界の一般に對し藝術の神聖を説くは、恰かも毒魚を食ふ者に蔬菜の滋養を説くが如く、其効極めて尠かるべきを以て、吾輩は寧ろ茲に其牛耳を執るべき者、及びかりそめにも斯界の泰斗と仰がれつゝある者に對し、聊か反省を促す所あるべし、蓋し其源泉の澄冽して、下流の沌濁する者なければなり。而して現時斯界の泰斗と稱せられつゝある者果して誰なるべきか、之を竹本攝津大椽となす事毫も異論なかるべし、彼の評判や實に往古の竹本筑後椽を凌駕する者ありて、人氣亦非常なる者なり、吾輩は筑後の名人たるを知ると共に、此名人を凌駕する程の勢力と人氣とを有する攝津をも亦知らざる可からず、而して筑後の名人たりし實蹟と、之を凌駕する程の攝津の實際とを比較せば如何、識者は既

に知悉する所あらん。即ち彼の門戸開放の實蹟と、此の門戸閉鎖の實際とは、恰かも歌舞伎役者と、田舎役者との如く相違し、而も單に藝術の上より之を論すれば、筑後の斯界を統一し淨瑠璃を大成せしめたるど、反對に攝津は自ら高しとなし、人爲の人氣を以て斯界を探離せしむるに至る、即ち甲が斯界の忠勳者なるに對し、乙は恰かも反對の位置にあるの觀を爲す、言稍々奇なるが如しと雖も其實際に於て然るを如何せん。彼の國家の大亂が禮節廢れて虛文盛なるに基く眞理より之を推す時は、自然の性情に合したる節奏を亂し、而も人爲の人氣の作用に乘じ、強て門勢を張り、他を牽制して獨り霸たる如きは之に附和して怪しまざる者を輩出し、究竟烏の雌雄を知るを苦しむに至りて、往古の統一は全く破壊せられ、而も後人の尙其眞似を爲す上に枝葉を生ずるに至りて、淨瑠璃界は四分五裂するに至るべし。即ち之が亂階を爲す者稱して以て然らずとせずも失當ならずとせんや、固より時代の風潮古に異なるものありと雖も、近松西澤が豊竹兩座に相對峙し相拮抗せしも終に提携して斯界に貢獻せしに非ずや。先進既に幾多の範を示す、現代の泰斗たるもの、將た名人たるもの、この大襟度、大雅量を以て、相融和し相扶掖し、子弟の適從する所を示して、共に斯道の發達を圖らざるべからず、然らずんば子弟教養の上に於て、憂懼すべき弊害を遺さむ、吾輩は切に攝津、大隅に望むもの、亦此の所に有れば、敢て苦言を吐露する所以なり。

(終)

傳記

六代目染太夫自傳

竹本叶太夫寄

(十) 染太夫一子源治郎死去の事

并實太夫萬吉心願斷食の事

世の中に恐るべきは鬼門金神の祟りとか、師匠染太夫は、先年本命的殺の方を知らずして、此東都に來りしが、其身に祟りはあらずして、藝運強きに依り、當地にても其名四方に知れたれども、争ひ難きは當地に着の其後は、一年に一度づゝは、聊かながらも障り事あり、師匠も是を心にかけて神佛を信ずる事世の人に勝れたれば、染太夫は御幣かつぎやと人毎に云なしける。さる程の信心者なれ共、其身の約束は是非もなし、大阪にて設

けし松之助は四歳にして死去し、又當地にて今の妻女に出生せし三歳の源治郎は此度輕からぬ痘瘡に惱み、師匠夫婦は只一人子の事故介抱如才なけれ共、疫病日に彌増し、とても治る様子あらざれば、祖父母妻女のかなしみ大方ならず、道の師匠も勢力を落し、家内は晝夜暗あかすのみ。實太夫は師匠夫婦の嘆きを見かね、何卒子息の命を取どめ度、當丸の内虎の御門の金毘羅様へ命乞の心願をかけ一心に念じけるにぞ、鶴澤萬吉も其心にて堀の内大師様へ斷食をして、命乞の願をかけ、初此堀の内と云は師匠の宅より道のり三里ばかり、萬吉至つてやさ男にて、心もまた優しき正直者なり、かゝる人物が一心をこめたれば佛神も感應ましますならんと、皆々猶も力を添へけれども、源治郎は養生叶はず天保二年二月二十日の夜終に冥途の人となれり。萬吉いまだ之を去らずして、堀の内なる宿屋に泊り、晝夜わかたず水垢離

を取り、只一心に源治郎の命乞を祈りける。されば實太夫は一刻も早くこの事萬吉に知せて、葬式にも立合せんと身拵へして堀の内へぞ走り行く。折からまきりに雨降出し、道の惡しき事たごへん方なく、漸う到り着けば、哀れや萬吉は、早三日間の斷食に瘦衰て髪振みだれ、顔も青ざめ幽靈にも等しき姿、獨りとぼく御千度を廻り居る所なれば、實太夫聲をかけ、此中よりの心勞いかにも勞敷、一先萬吉を連歸れと師匠の頼み故わざわざ迎ひに來りしなり、兎も角宿屋迄歸らるべしと何氣なく云ければ萬吉わつと泣出し、大地にひれ伏腰も振り、暫しは啼音も止ざりけり、やゝあつて顔を上云けるは、兄貴の偽りは始めに夫と早知たり、扱は命乞の願は叶はずして、源治郎は死たるかや、是全く我等が信心の届かざるゆゑなれば猶更爰は去がたし、とさめく泣くづをれて其座を立す、せん方なくて宿屋へ歸り白粥を焚せ置

き、四つ手駕を雇ひ、萬吉を無理に乘せて連歸り彼白粥を食せ宿の仕拂をして、駕を早めて大雨の中、小松町の師匠の宅へかけ戻り、師匠夫婦に對面すれば、夫婦も萬吉の心底過分さに一禮をのべられ、一同愁にあづみける。葬式いかゞと尋ねれば、野送りは遠方の墓所故、とくに送り出し、最早其寺へ着時刻と聞て今更跡を追ふとも追付事ならず、扱もくかへすく殘念と、實太夫は氣振の如く、又萬吉は勞れの上に駕にゆられし事故に殊更正體なかりけり。程なく野送りの人々は寺より歸り、いづれも二人の心底推量してそこ／＼に諫め立歸る。七日々々のだひ吊ひ、忌明もすめば世にまぎれ、次第に愁も薄らぎて、月も立、年も立、早翌年の如月も打過て、桃の月の春めきて、卯月、五月雨、水無月は、人も浮立兩國の涼みの頃も過行て、文月、葉月、菊の月、秋は殊更風流の菊の花壇は紅葉の、ざんざん諷ふ世の榮、無常

の跡は悦びど、爰に師匠の内實いね女は、いつぞやより懐胎し早臨月に成にけり。

上村源之丞の事歴

淡路 引田源之丞

(二)

我が上村源之丞の人身座は現今では左の五組に別れてゐる。

大黒組 主任 引田 喜三

太夫豊竹新呂太夫

戎組 主任 津田 慶次郎

太夫豊竹横太夫

辨天組 主任 引田 仙吉

太夫豊竹浪太夫

福六組 主任 吉岡 義雄

太夫豊竹呂關太夫

る事になつた、座員も元は四十名以上あつたが、受元が、餘り人数の多いのを、彼是と云ふ所から自然と人員を減じる事になつた、今の處太夫は六名、三味曳は五名、役者は十七八名、係りの者は五六名である、巡業先は、頭取が先廻りをして約定を極めて置くから毎年舊曆の正月十日頃に國許を出て其年の暮に國許へ歸るまで少しも休みはない、老舗と云ふは有難い者で、行處が無いからといつて、中途から戻つて来る事は滅多にない、年の模様で利益の多少はあるが、未だ中途解散の悲運に逢ふた事はない、又源之丞の本家には演藝部の事務所があつて数名の事務員が事務を執つてゐる、諸國から興業の掛合がある時は直ぐに返事を出して處分するから少しも興行が滞らぬ。

明治四十年神戸湊川新開地の地所を買つて、同年七月十八日から劇場新築の工事を起しこれを定席として大阪の文樂堀江の兩座同様年中興行すべき

多聞組 主任 隅田 茂平

太夫竹本錦太夫

右各座の組織は同一にして、主任、頭取、太夫、三味曳、人形遣共一行都て三十五六名、荷物は成るだけ手輕くして、百五十石の船一艘で積める、汽車なれば、貨車二輛である、昔は實にたまげるほど荷物を持たものである、大八車を何十輛ともなく使つたものである、船なれば三百石積でなければならぬ、駄馬も多く使つたのである、費用の多く掛るには目をかけず、たゞ荷物の多いのが人氣を取つたのである、又源之丞の人形は頭が大きいと云ふ評判を取つたので段々頭を大きくして夫につれて衣裳も大きくした、大體の人形は鳥渡小柄の人間程あるが、此二十年以來遂に扱ふに困るほどの大人形となつた、近來時勢の風潮に伴はれ荷物の多いは馬鹿々々しいといふ事に氣がついて荷物を手輕くするについて人形までも加減して作

計畫を立て同年十月二十九日落成して稻荷座と名づけ自家の人形一座に大阪の若手花方の太夫を加へめでたく開場したところ、非常の好人氣で、連日満員札留となつた、夫より取かへ引かへ藝題をかへ太夫をも差しかへて一ヶ年と九ヶ月の間打續けたが或る客筋から此の一座を雇ひ切りにして巡業する事になつたので、稻荷座は監理人の山田松之助の取次で他へ貸渡した、昨年の夏は右湊川の有志に望まれて「楠正成一代記」といふを不肖が十二段に作つて稻荷座で興行したところ好評で二十日間興行した。

松葉籠

巢林子墳墓考證

小野利教

(三) 日昌上人と近松門左衛門

前に述べ來つた通り、日昌と其父尼崎屋吉左衛門及び正本屋九右衛門との關係から、近松翁はいたく日昌を信じた。従つて大の妙宗信者となつた。

されば廣濟寺に來賓したことも幾回なるか知れず盛に日昌と消息の交換をしたが、惜いかな散亡して今はない。その來道した時に書き捨てた自畫賛やら、俳句などもあつたらしい。現に翁が戲墨の團扇が二本までは、數年前に見たといふ人もある位だ。今百講中列名には、御經十部の施主として記名してゐる。享保元年丙申九月の記名ある開山講中列名縁起には、正本屋、及び尼崎屋と共に署名捺印してゐる。同月九日、母なる人の爲に法事を營んで、左の品々を寄附した。

一 慈鎮和尚法華經二十八品和歌二卷

二位大納言實藤卿墨痕

右 奉納久々智山廣濟寺 近松門左衛門

一百十二代後西院勅筆

高松殿ニ在御ノ時御七歳之宸翰也

右從町尻宰相兼量卿賜之仍奉寄附於久々智山廣

矣日一具足居士と論じた。妻女は後れて没したが一珠院妙中日事信女と號し、本堂の東なる塋域内に、東向に自然石で高さ臺石共二尺四寸許の碑面に、夫婦の戒名を刻して、裏面には没年月日を記してゐる。此の墓は彼の日本技藝の總司といはれた三代目歌右衛門、即ち中村梅玉が晩年參詣するに不便なので、同型同式の移しを谷町法妙寺に造つて、これに參詣したのである。弘化四年末の二月、翁の曾孫と稱する狂言堂門三郎春翠（後に近松藤原爲細と名乗つて、別）及び近松門松（後に門三郎と改め號に春の家織月と稱した）及び近松門松（を十方舎一丸といつた）と、その門人近松門造、即ち吞空齋吐月等が發起して、翁の百五十年忌取越しを行ひ、廣濟寺、法妙寺、兩墓の修繕をした時、臺石を取りかへたのである。

翁の没後、三回忌を終りし翌年、日昌は翁の女孀杉森多門梅信をして、釋尊涅槃圖を畫かしめ、翁の冥福を修めた。記録によれば享保十二年丁未二

濟寺者也

近松門左衛門

然して過去帳には、智法院貞松日喜、本願人近松門左衛門母と書いてある。翁實に元祿三年、三十八歳の時を以て浪花に移住し、堀江の鑄物師山城屋宗左衛門の女を妻に迎へて二女子を生んだ、長は彼の杉森多門梅信の配であつたさうだ。かくて正本屋とも、尼崎屋とも、相携へて廣濟寺に來遊した、或は竹本筑後椽など、共に來たかも知れぬが、惜いかな兩個天才の會談遊樂した當年のおもかげを語る資料のないのは遺憾至極である。享保九年十一月二十二日、最後の作たる右大將鎌倉實記の場に上るを見ずして、流焉無常の逆旅を去りて、常住不變の蓮臺座に入つた、大阪に移住してより三十五年目にて、行年七十二であつた。生前日昌と親善なりしと、正本屋、尼崎屋などの檀那寺たる關係とで、廣濟寺に葬つた、日昌導師となつて、盛んなる葬儀が執行されて、阿耨院穆

月十五日とある。軸面に日昌手録がある。此他釋迦、文珠、普賢の畫、及び扇面の粗畫等、いづれも梅信の遺墨を傳來したが、今は散亂して近き里人の有になつてゐる、次に過去帳について一言して置きたいのである。

近松曲稽古日記 (一)

東京 細川 鶯聲

今日から『酒吞童子枕言葉』を、『衣洗ひ』より習ひ出す。これは近松曲の中でも、珍とすべき部類で、近來の太夫で、誰の語物であつたといふ話も聞かず、無論、振本も出來てはをらぬ操で興行されるのは、後作の『酒吞童子話』の方に極つてゐるのに、この崑山の片玉を拾ひ得たのは、譯もなく嬉しかつた。古曲特有の『文彌』の多いもので、一中節にもあるだけに、それに肖通つた風のある曲

である。——七月二十六日。

『酒吞童子』初回の稽古に發聲。鳥渡變つた節には「江戸が、り」、「平家が、り」、「入ぎん」、「一つゆり」、「八つゆり」等、皆會得し悪くはなかつた。衣洗ひの女の詞が、全部地色になつてゐるので、このところが尤も語り悪い、そのうちで「可愛や、不慙や、妹も、ゆふべの寢酒に引裂かれ、今の命も覺束なく、血をすゝぎ捨て死骸をも、せめて清めん志」といふ文句の、この「今の命も覺束なく」といふのは、衣洗ひの女自身を言つてゐるは無論だが、省筆のために、引裂かれた妹の事を言つてゐるやうで、變だ。文を讀ますのでなく、曲のみを聴かせるのでは、こんなところの理解が一つ層困難である。全體這曲には、難解の文句が尠なくない、「みあぐればばんじんのせいげつしのぎをけづり」を、一中節の『扇拍子』には、見上れば萬尋

の晴月しのぎを削り」となつてゐるが、附會の宛字ではあるまいかと思はれるのだ。——八月八日。

『酒吞童子』の稽古は、第二回目に進んだ。このところの曲調は、風變りも極度になつて來て、頼光が鬼が城に着くまで、纔か二三行の文句の間に「おくり」が一つ、「三重」が一つ、重つてあり、酒吞童子の出には、一句一句、合の手がある上、メリヤスで謡が、りに語るどころもあるといふ風だ。この出の紙數で一枚ばかりの一節が、丁度五分間を要するなぞは、淨瑠璃曲中他に類例があるまい。も一つ節使ひに感じたのは、衣洗ひの女の歎きを承けて、「頼光泪ぐみたまひ」といふ文句が珍らしく「本節」になつてゐる事である。元來「本節」といふ節は「小おくり」や、「うきおくり」と共に、一段のマクラにあつて、無意味に叙景叙事の文章に嵌められてゐるものだが、自分はその音律の、盤

恒低徊した一種の情趣を帯びて「小おくり」や、「うきおくり」と同一感を起すべく、あまりに多く哀調を齎らすのを異としつゝあつたので、這曲のこの節に出會つて、適材を適所に措いた用意に切實に憾されたのだ。

近松は、後年「博多小女郎」で、鬼の泣聲を「くわん／＼」と形容した筆才の發露を示して、こゝには復た鬼の詞の「いんにんぎやらいがるまんすうごう／＼らう」といふのがある。『國性爺』の唐音の「きこらい／＼びんくわんたさつおん／＼」なども、つまりはこれを轉換したに過ぎまい、對比して愈々妙味を覺れた。——八月十六日。

『酒吞童子』第二回目の稽古に發聲。この間は曲風の變つてゐる割合に、節に手の込んだところがないので、比較的樂に通過した。語りながら圖らず氣がついたが、鬼の詞の「いがるまんすう」のがは

普通語の半濁音に言はず、九州語のやうに濁音に言ふのが、作者へ對して忠實な語り方であらう。

八月二十八日。

『酒吞童子』の稽古は、第三回目に進んだ。曲調は前回と比べて、平凡で、「五重ゆり」といふひと節變つたのがあるきりだ。元來この酒吞童子枕言葉は、山本土佐様の『酒吞童子』へ、謡曲の『大江山』を加へ、これを近松の例の才藻で潤色したものであるが、この邊は土佐様のと、文章も大同小異である、が、頼光のお流れを酌む酒の對手はあつちはお網になつてゐるのを、こつちでは公時になつてゐる。

これは「加賀に菊酒、南都にかすりぬ。」云々の詞の上から、その詞が酒豪の言草らしい上から、どうしても公時に限るやうに考へられる。——八月二十九日。

鬼もわん／＼

小野 棣華

『酒吞童子』の稽古は、昨日第三回の發聲を始め今日は第四回目に進んだ。酒吞童子が物語の間は山崎美成が『世事百談』で「名人の書けるものは、かゝる荒くれたるものをもの哀れに見する事、筆力の妙なり。」と嘆稱した名文だが、自分は復たこの作曲の、それに劣らぬ精力が盡されてある事に驚かされた。鬼氣人を襲ふとは、かういふ音曲の事であらう、丁度針金三味線を聴いてるやうで一へ這入る鈍い音が、不思議にもの凄く響く、そして手の込んでゐる割に、木琴を弾いてるやうに少しも汚れた音がしないから、ます／＼他界の音楽を聴くやうな感じがする、面白い音曲といへば賑かな、派手なものど極つてるやうに思はれてるが、こんな「寂び」「凄味」が、同じ三筋の絲から出るといふ事は、淨瑠璃三絃の權威として何とも喜ばしく考へられた。

九月十日。

(淨瑠璃印象記)摘録

つた、またその袋の端から白い尾の如きものが二つ三つ見えた。
聯想は寤寐も忘れぬ近松翁に及んだ、翁かつて博多小女郎をものせるその中に鬼もわん／＼泣くばかりと云ふ文句があつた。或人が翁に向つて難じていふに、鬼がわん／＼と泣くと、犬と少しも異なる所がない、どうもこれは穩當でない、何か外に泣方もあるらうといつた。近松翁はやをらその稿本を本函より取出して、其人に見せて、どうか適當な泣聲に訂正して呉れといふから、其人は腕を父ぬき首を低れてじつと暫く沈思した、そこで噉々、啾々、噉々、啾々、噉々、噉々、噉々といろ／＼遣つて見たが、どれも適當でない、忽ち筆を投げすて、いふには、我いまだ鬼の號聲を聞かないから、どうしても訂正することが出来ぬとて、頗る閉口をした様であつた。すると翁は、夫では鬼も噉々で可いでないかと言つて、その本をもとの函に斂めてし

去月二十八日の早朝、山縣公爵の君を無隣庵に訪はんとて、烏丸の旅宿より俣を北へ走らするに、骨に透る寒さに伴ひ一陣の血腥き風が吹いて來た、只見る頭の片つら脱毛げたる、隻眼の眇たる、痘痕面に髭のもや／＼生へたる、五人、六人、太き棍棒を脇挟みたるあれば、重げなるもの肩上たるありていづれも怪しげなる着衣に毛脛あらはし、息喘切て驀地に馳せ來つた、驚く俣夫よりも余はまづ胸を躍らせた。
渠等は物に迫はるゝ如く、振り返り／＼單走に通るのである、余は車上に身を反らして、不圖渠等の背面を見た。
重げなるものは南京米袋であつた、さらば竊取した米か、否々鮮血淋漓と渠が腰邊に滴下しつゝあ

まつて、更に話頭を轉じたといふことを、高村幹齋の奇談新編から援記して小笠原君がよこされたのに思ひ及んだのであつた。

世にはおのれに力なくして、好んで人を批難する者が多い。若しおのれに經驗あらば、克く人の苦心をも察し得らるゝものであるが、得て鬼のわん／＼を難じた輩が多い。他人が最愛の畜類を撲殺して生業とせる鬼もあれば、他人の爲す所を見て信々とはわたりてゐる犬もある、あゝ鬼もわん／＼、犬もわん／＼。

古 錦 囊

鸚鵡が柚の序

小野 稻洲寄

淨瑠璃道の指南車たる、然も世に珍書とて尊重せらるゝ鸚鵡が証は竹本筑後樓(義太夫)の序文に近松翁の自跋あり。

文章の妙味云ひ、殊に筑後、櫛原、序文は、斯道家の心得となるべき節少なからねば茲に掲げて諸君の参考に供せんす。いろはにはへとは尊圓親王の御筆も、七歳の太郎松が書るも點畫かはる事なく、いの字はいの字によみ、ろの字はろの字にきまれども、善惡の階級は千重萬段心こそ葉の及ぶ處にあらず、からにしき首元の王義之、趙子昂、敷島の倭には道風、佐理、行成などあまたの名筆の工みに書なせる文字の形えなく、なれど、筆法は十二點にはじまりて、十二點の外を出ず、韻會、字彙、玉篇等二十餘萬の鳥の跡たせぬ實なりけりと物書人の語り給へるに、かたへなる萬に心得たる人の申されしは、六藝の道いづれかかはる事のあるべき、文武の樂は美つくし善つくさずのたがひめこそあらめ樂においては五音十二律にもるべからず、申樂を見侍るに上手のさし扇、下手のさし扇、さす處にちがひなく、引處さらにかはらず、つみみ、太鼓

また然なり、上手の笛とて笙、簞簞の聞も吹ず、ひいやひいやりをよくくく吹あふするばかりなり。立出て峯の雲は、誰が舞ふても熊野、四海波あづかにては、誰が諷ふても高砂、平家のふしに諷ふたる名人もなければ、よしあしの雲泥なるはいかにぞや、萬藝かくのごとし、定まりたる事を能すべし、但その中に曲節は時にしたがひ折にふれて臨機應變まゝ有べきにや、まかはあれど、利休紹鷗、宗和などのかはりし物數奇、目をおどろかすといへども、湯の上に茶を入れて香煎ふるやうなる無理なる、物好もなし、名におふ歌人のさまざまの狂歌の難體はあれども、五七五七々の外はよみたまはず、もろくの藝能、師傅を受けて定まりたる事をよくく切瑳琢磨して、時に應じて略變の用捨こそ達人のわざとも、名人の藝ともいふなれと語り給ひしを、僕末座にありてつくくうけたまはるに、我淨瑠璃の道におもひ合せていさ、

かも違はず、淨瑠璃はじまりて百十餘年、瀧野、澤角兩檢校、平家にくはしく、琵琶の妙手たりしより、淨瑠璃物語と云双紙を綴りなして、藥師の十二神をかたどり十二段と云ふしを語り出せり。其時は三味線に合すると云こともなく、扇をひらき左に持、右の手の爪先にて、骨と地紙とを搔ならして、いろくの拍子をとるたることなり、その十二段の目錄さへ今は知りたる淨瑠璃語りもなし、此外に都めぐりと云もの一段あり、是は檢校の門弟東洞院日貫屋長三郎といひし人の作なり。かけまくもかしこき慶長の帝これを興せさせ給ひて、人形にかけさせ観覽度々ありしより、淨瑠璃太夫受領を拜し、世に行はれて阿口の判官、弓繼、鎧がへ、井戸田、五倫くだき、是を五部の本節と傳へ侍る。岷江の濫觴たわすはびこりて、音曲の海、波えづかなる時津風、民やすき御代の樂しみ、淨瑠璃と云一ふしの定まりぬるこそあさ

からね。何の道も古へをあふぎて今を志のばざらめやは、此音曲も格にいりて格を離れ、格をはなれて格に在るといふ事第一の習ひなるべし。古播磨太夫は淨瑠璃の中へ諺を入しさへ、まんざらの諺に聞ゆるにはあしと申されし、諺にても、歌にても、淨瑠璃に打そひて淨瑠璃の格にはづれぬやうにうたへと申されしは肝要の詞なりけり。僕が門弟には淨瑠璃の文句ならば、諺も唄もうたふとは思ふべからず、語ると云べしとこそをしへ侍れ。いはんや時々のはや歌、木やり音頭の類、面影はさも有なん、淨瑠璃の正體に眼をはづすべからず、世の流行歌とて半年はやるはまれなることにて、上方の流行ごと遠國にあらず、田舎の流行もの都路にしらず、上京のごと下の京に聞えず、天満の噂難波に知らぬ事のみ多し、異國には大きな御殿ひとつの内にさへ一日の氣候ひとしからずと云へり。流行ごとのみ好まずともあらまほし、

世間の事聞出し淨瑠璃に入んより、手前の淨瑠璃世間にはやるやう稽古ありたきものなり。世繼曾我的道行に馬方いやよと、をどり歌いれし事相應せず、一番の瑾今聞に汗をながすと、三十年前を後悔する作者の心、藝道の執心さもあるべきことなり。實も文言章段の品によりて、いかなる名人も語り得がたきことあるべし、堅からんとすれば太平記の如く、艶ならんとすれば源氏物語のごとく、端手ならんとすれば當世好色双紙の輕口に似て、各々淨瑠璃にあらず、詩人の平仄を分ち、韻字を押も、律呂にかけてうたはん爲とかや、此國のうたひもの吾駒貫河、伊勢海などの優なる、早蕨、吉々、利々、老鼠などのおかしげなるも、呂律にたがはぬこそありがたけれ。其ごとく、文句にもはこび、はかせ、およぎ等程ひやうしあることなれば、それに心を付て文字うつり、音聲、開合、甲乙の位を練磨すべし、申も憚り有ども、道

かはりたるふし古今なきことなり、只趣向、年代せりふ、風景、時宜にそむかず、無理ならぬやうに地色、ふし詞まで心をかへて精をふかく語たす事、かの病根によりて配劑加減あるが如し。外のこと交ゆるは、一味二味の加藥の如く、本方の爲の加藥にて、加藥の爲の本方にあらずと知るべし。かく有ぼとて、本式に脇目もふらずつくりつめたる如くなるは佛藝とて嫌ふ事なり、其外の意味は聲と節との和にありて、言語道斷天然の處なるべし、萬卷の書を暗じて、面授口傳なくしては萬の道なりがたしとかや、峯の藥師の淨瑠璃の本方相傳のうへに年を重て工夫をつみて、加減の修行あらまほしく、四十餘年來寤寐にも是をわすれずと雖も、今に淵底を盡さず、是と語り得たりと思ふ事のなきは我身ながらいかなる事をやと申侍りし詞のうちより、山本治重（稻洲曰治重は正本屋九右衛門にして即ち一鳳

一六
遙院入道内府實隆公は御日待の夜、尺八、ついで三味線などの中にいで、我も一藝せんとして常木品定の巻を素讀遊ばされしに、あやしの下部まで聞人感にたへて、外の歌三味線をもけおされしとかや、源氏の讀くせ堂上の御傳授には清濁文字うつりは勿論、御聲になまりを付させ給ふ處、ふしを付させ給ふ處もありとかや傳へ承はる、是等をこそ音曲の龜鑑とも申べかんめれ。是までは恐れあれども、一藝の本意を知らんとはげむべし、まして拙き辻藝、門音曲を大事ありげに語り交て淨瑠璃本節の有處を失ふ事いかなる下劣の甚しき本心を外に奪はる、狂人をやと、宇治加賀椽の批判尤もなるべし。若聞人外の交事をほむる時は、扱は吾淨瑠璃は劣れるとかへり見て、いよくたしなむべき事なり。名醫の調合ある益氣湯も、野巫醫者のあはする敗毒散も、藥味はかはらねども、大きに人ををこなひ、又大きに人を助く、淨瑠璃に

なり。其座にありて鸚鵡が柁の板行なりて、いまだ序とする物なし、幸に只今の教訓あるしてよと、硯をならして口うつしのやがて紙上にうつりけるはむべもあふむの轉なりけらし。稻洲曰以上は卒業古雅志に載する處、然るに南水漫遊には尙以下の文字あり左れど是は何か他の序文の混同せしものには非ずやと思はる、節あれど、序手なれば茲に記す。今此翫び隆盛にして、雲の上には大宮人の櫻かざし給ふ頃、諸侯は御在國のつれなく、淨瑠璃をうつさしめ給ひて、僕が墨譜の仰を蒙るも多かり。板行の書なりては、富家の深閑にも翫び、遠國波濤の樵歌にもまじりて、道の廣く布きわたれる事のあらたのしきかな、唯重板、類板まぢ／＼にて或は七行に書かへ、手にことわりもなく奥書名乗を似せて、直本、正本と偽り、世を欺き、まかも文字を荒け、紙數を重て、價を卑くし、

藝の道を輕蔑にし、直傳を打消んとする意路のわるき類ひ、傳々寫々として節頗墨にいたり、毫末の誤り大なる相違なる事、我猶是をやめり、たとへば唐人參の見ば能よりも、朝鮮麗人參の功能はるかに増るがごとし。夫が故に早くよりせしが如く、予が名の下に青赤の二印を加へて直傳と著すは、山本九右衛門一家に限りて外にはなしといふ事を、爰に記して是を序とするものゝかり。

竹本筑後橡藤原博教

反古しらべ

近松翁の書翰

左に掲ぐるは、近松翁の書翰なりさて、世に傳ふるものである、近畿名所巡りの案内狀にして流石に道行振りは右手の物ほごあつて面白い。

の城、是らは街道より遙か西に見渡るよし。生駒山、尼上ヶ嶽、當麻寺は中將姫の古跡也。本堂金堂、絲線堂、蓮の絲の蔓茶羅織殿の間、左は大師手習の間、腰掛岩、染の井、同じく紫雲庵、絲かけ櫻、片岡過ぎて達磨寺、清水堂、志貴山の毘沙門天、立田河の流れは今も中たわす、頭を回らせば三熊野の浦、彼方に淡路島山、和歌の浦、攝津國に住吉四所明神岸の姫松幾代經ぬらむ萬代の池、天王寺は往昔聖德太子守屋大臣を誅伐以後の草創にて、佛法最初の御寺也。石の寺居は釋迦如來轉法輪、正等極樂土の額は木工頭小野道風の筆跡とかや、石の舞臺、龜井の水、雲龍堂、庚申堂、堺の濱、高津、志貴津、難波津、御津の浦傳ひ、此地に於て案内を頼み可申哉。名所舊跡の望み一返の事ゆゑに歩行路も樂に與あらむか。大阪御城下に一宿し淀船に棹さへせ、橋本より八幡へ

内々龍田詣の事、漸く紅葉も時を得べき折に候。いつ頃思召した、せられ候や。可任其元御勝手次第候。去りながら此月中可然存候。隨御返事此邊の衆中可申合候。道筋の趣は兼て大和路一望の事に候。先南都に差かゝりて春日の御社、若宮、夫より興福寺、東大寺等の伽藍を始め、新八幡、猿澤の池、衣掛柳、采女の宮其外堂塔佛閣、遂拜見當所に暫く滞留し、龍田詣成就いたし、法隆寺、三輪在原寺、石上巖通の宮を拜禮し、初瀬に參籠し、多武峯は大職冠鎌足卿の御廟所、是藤原氏の曩祖とかや、偕吉野には下の權現、上には藏王權現立せ玉ふ。これ役行者一刀三禮にして刻みたる也。御本地は則ち釋迦、千手、彌勒の化現たり。西河の瀧を打眺めつ、漸く和泉路にかゝりては後醍醐天皇假に籠らせ玉ふ笠置寺、楠正成公城郭を構へられし金剛山、麓の千早

額づきたる上、石清水放生川も過、高良神宮寺、また女郎花塚などをも相たづね、老少共に疲勞し侍らば山崎寶寺、水無瀬川、是らは重ねての樂みとし、雄山より宇治の里を經過し、平等院、扇の芝、菟道橋、真木の島、朝日山、恵心院、山吹の瀬に春を契り、興聖寺、それより黄檗隱元禪師開基にて萬福寺、本堂食堂のこらず順禮し、則ち小倉堤より豊後橋にて暫く憩ひ、御香之宮、深草極樂寺、藤のもり稻荷、道すがらゆる／＼と參詣いたし、罷歸申べく候。猶また東山の參會近日の條、心緒期其節候也。穴賢。

淨瑠璃絶句

國性爺合戰

此遣水より黄河まで吉たよりには白粉流し、叶は

べに流の段

淨瑠璃文句語呂合せ

稻洲投

俄天窓にばてかつら、

(今は仇なれこれなくば)

稚兒に花笠着せて居る、

(命からく逃げてゆく)

反橋はだしに成かゝり、

(それがし佐々木に成かはり)

擔桶に冷して店で賣る

(跡に見なして出て行く)

お宮は高津ぢや町の景橋の景

(お馬が通るぞ先のけく)

社家はしゝらの麩斗目衣、

(さては父かと飛わりる)

赤い襪の紅屋どの、

(あさきたくみの鹽冶どの)

ぬ知らせは紅脂を流す約束にて迎にお出ある筈、
いで紅脂といて流さんと常の一間に入にけり。母
は思にかきくれて思ふに違ふ世の中を立かへりて
夫や子に何と語り聞せんと思ひやる方なみだの色
紅脂より先の唐錦、きんしよう女はその暇に瑠璃
の鉢に紅とぎ入れ、

立向フテ長溝ノ水ニ。方サニ將ニ覆ハント燕脂ヲ。
有リ所約スル。事急ニ報メ君知ニシム。

増補天網島

茶屋の段

死すに事のすむやうにどうぞお前を頼みますと語
れば領づき思案顔、外にははつと聞いて驚き、思
ひがけなき男ぎ、木から落ちたることにて氣も
せき狂ひ、扱はみな陸か、二年といふ物ばかりさ
た、根性くさりしアノ野狐め、ふんごんで一討。
戸外聞ケハ相語ル。貪生負約ニ辭。三歳綱繆
意。悔ラクハ爲ニ娼婦ノ欺カレシヲ。

詞の花

漢詩

院本阿漕浦

橋本海關

怪看滄海射三光輝。破禁深更網劍婦。罪迹恨憑三
蓑笠一見。丹心却悔母心違。

演劇

鼓絃聲裡伎頻催。彩慢圍場閉又開。割腹翁成三
尋レ母女。假啼巧泣ニ萬人來。

和歌

近松門左衛門

岩田宗春

一本のふでのいのち毛いろくくに
うき世のさまをうつし、や君

質

疑

大阪市 聞天狗

問 近松翁以後に近松を名乗つた人を聞かせて下
さい。

答

巢林子の後に近松を名乗つたものは、先づ近松半二、近松保藏
近松柳、近松柳作、近松松助、近松湖水軒、近松子葉軒、近松
梅枝軒、近松加藏、近松萬壽、などがあります。尙近松翁の曾
孫さいふ近松春翠、同門三郎、弟子門松などもあります。

問 貴誌に連載せられた梅忠講義中に、八右衛門
の詞に不動参りに待ちますぞとある、この不動
は何處の不動ですか承はりたい。

答

これは北野の不動です。それは八重葎浪花濱咲さいふ淨曲の北
野若林屋の段の枕に、浪花津に利生も高く名も高く北野の不動
の靈場に、眞實かこひし休床若林屋がいそがしさ内は間敷も幾し
きりさある、これで所在も明白でせう。

問 も一つお伺ひしたいのは、曾て貴誌に瑠璃の
屑といふ題でいろくくの淨曲に關する事がかい
て有つた中に、一日に三つの出來事が有つたを

直に淨曲に仕組んだとございました、それは何
といふ外題ですかくはしくお聞かせ下さい。

答

それは今お答へをした入重霞浪花源がそれです。これは寛延
二年彌生二十六日豐丈助、安田蛙桂、豐正助、淺田一鳥の合作
で鹽竹越前少様の語初である、入重霞とはしくが入重といふ
名であつたのさ、時が春であつたからだ、無論かしくが主にな
つて、大工の弟子の情死さ、神崎の馬子の喧嘩は附たりになつ
て居ます。

通信

岡山だより

南券藝妓の慈善淨瑠璃

三三化生

時節遅れながら水害義捐と銘を打つて其實中檢對
抗政策やら、新抱妓の披露やらを兼ねて、去月二
十二日から三日間、當地の柳川座で開いた、御最

負方や彌次連で、毎日の大入とは優勢しいが、此
中には木戸御免の連中が二三百籠つて居るとは木
戸番の話、▲太十(小蝶)、日吉三(三吉)、先代萩御
殿(初子)、信功記三(笑八)、志度寺(照之助)、御所
櫻(八十)、までは頭數、十七助の忠臣藏六つは勘
平が腹を切らずに居り、廣吉の紙治は始め善く終
だれ、島之助の壺坂は澤市が馬鹿に若い色男に聞
わ、榮之助の菅原四重みもあり上乘なれど頼の運
動が目につく、三之助の三十三間堂は十八番と見
わて手に入つたもの、木遣りも奇麗に聞かれた、
八兵衛の千兩幟は女房よりは猪名川の方が善かつ
た、常六の一の谷三は熊谷の出来豫想外に上乘、
慾を云へば今少し聲が不足、筆助の酒屋、可もな
く不可もなし、廣助の質店是一寸他の真似が出来
ぬ所がある、時々文句に誤りあるは壁に瑕、但し
筆頭は矢張り彼れがものならん、總かけ合の會我

對面は無難、筆助の朝比奈、廣助の祐經は目立つ
て居た、大切として忠臣藏旅路の嫁入り、お染久
松地藏廻りは太、細かけ合で生人形入り、二つ共
道行は御馳走過ぎる感があつた、人形では小政の
となせ、てまりの久松、廣吉の奴上出来、人形遣
ひ役米太郎は御苦労。

松の雪

御影電々軒

當る十一月の吉日。攝州は灘の新在家松本氏方に
新築移轉の披露を兼ねて神戸蟠龍軒門下の天狗會
が催された。聴手が何れも歴々なる上に。語りま
する太夫が奇抜揃ひで稀有の盛會とはなつたりけ
る。招待の謝辭に代へて感聽の評判東西――。
▲二十四孝謙信館 東師 (東明病院長本多君)
君は漸と近頃の修業とて絲にかけた事無之との口

上に拘はらず、何の苦もなくやつてのけられ。絲
どの交情も不思議にあざやか。語口は濫い方で。
乙がよいのは三十石で練つた効かとお喝采。
▲阿漕平治住家 如醉(兵庫明治工業會社河南君)
君は音聲にさびが有つて。前段の花やかな後へ丁
度調和がよく。老熟な處に甘味を見せられた。

▲太功記出陣 諏訪 (前代議士神戸伊藤君)

君は天性の美音が累を爲し二三段習りたくて堪ら
ず。去る五月より始めて七月以來廢學の處。満堂
の歡迎默止難しとあつて初の舞臺に上られたが。
十次郎や初菊を巧にころがす舌力中は々に侮り難
い。妻が知らないで何としようのあたり金聲玉振
の初歩に近いと見た。

▲忠臣藏殿中 柳笑 (神戸片岡商會片岡君)

君は體格に相應しき強聲で師直が大に引立ち鮎だ
／＼の大喝の如きは手一杯に行きて大當り。

▲忠臣藏切腹 多聞(神戸藤田内科院長藤田君) 君がこの難物を引受らるゝ苦心は判官の切腹にも劣るまじと思ひきや、手負の言々々々に習練の程見ゆ天晴判官を語られた。恐くは臨床實驗に得た所が多からうとは成程さうなづかれる。

▲戀女 房子別 末廣(東洋汽船神戸支店長中島君) 君はあの聲でとかげ喰ふか時鳥のそれならで。二十五貫肥満の腹中より絞り出したりな玉の聲。千三百石の前後より一段と油が乗り母子の情合かゆい處をかくが如し。馬子歌は自尊の十八番とて甘さ加減十耳の聴く所。稽古の徳か天成の巧か。當夜の秀逸は辭すべからず。

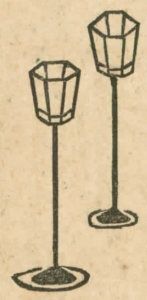
▲伊賀越岡崎 三痴 (神戸棧橋會社松本君) 君は寫眞球突義太の道樂あるにより三痴と稱せるほどの近松熱心にして。稽古に怠り無ければ。語り口に弱味無く。對話は最も手丈夫なりし。數日

時 報

仁丹別莊の催し 僅々八九年の間に一足飛の大發展を爲したる賣藥界の覇王森下仁丹君は金の満まるに伴れて長壽の道を講じ何でも樂しみなが知らずの間に攝生となるべきものなをさるゝ考へた末、近時紳士間に流行する淨瑠璃こそ適當ならめと俄に稽古を始めたが何事にも人後に落ちるを肩しさせざる君の事ゆに誰に聞かしても可笑しくないといはれるまでは秘密に附して店の者にも隠せまじと細君にも内意を含め、人知れず稽古を勵んでゐるゝげな、處で君は店員を使役するにも成る丈文明的にせんとて毎月十五日には休息を與へて天王寺の別荘に集め何で好きな遊びをさせる事になつてゐるので、去

來準備に忙殺され且つ祝盃に喉を痛めつゝ尙かの餘裕ありしは手柄なり。慾には姿勢が幾らか崩れるを改正ありたしと申上ぐ。

▲伊賀越岡崎 喜樂 (神戸堀尾病院主堀尾君) 君は三昧にも堪能なだけあつて節回はしの細いのと。音聲の美はしいとが專賣である。世話物を開拓されなば上達は請合とのこれ沙汰。▲餘興 樓上の二次會に於ける東師の三十石は輕舟澱江を下りし昔の風物を偲ばしめ。中島君の二上りは聴く毎に耳の廣がるを感ぜしめ。とりぐの合唱喝采に。主人公は大恐悦。太夫連は大満足。目出度かりける次第なりし。



る十一月十五日には晝間は鈴々勝手な遊びをさせ夜に入つては自分の好きな淨瑠璃會を催して親戚縁者の人々をも招待した。おイヤ中々盛んな事であつた、第一座は森下君の舍弟 森下松竹君の思臣藏二段目の松切、初心の割には甘かつたといふが、出後れて聞漏らした、第二座は藤澤正策君の下屋敷、三千歳姫のサワリ、伴左衛門の言葉も悪くはない、樟腦入りの箱入りの、手堅い處、價値らしい、第三座は福井福司君の勘平腹切、多年叩き込んだ上に春子太夫を師として熱心に稽古を勵んだ効能は争はれぬ、餘り春子に似過ぎて臭い處もあるが何しろキツシリと能く覺けたものだ(金は女房を賣つた金)など器用に巧く透してアツといはせた、第四座は谷文玉君の玉藻前三段目、十番の出し物でもあるが體格さいひ音聲さいひ有り餘つた上に稽古が

つんでゐるゆに追々大きくなつて何處へ出しては仏は取らぬ、一隣宗匠の糸も達者で面白い處がある、第五座は渡邊文洲翁の赤垣出立、鎗の乗つた買目のある形でシツトリと落つて語り出す工合、どうしても紳士仲間のドツサリ、板、源藏の笑ひも大きく老母の言葉にも情合もこもり、段切の乗地になつてはいふゝ、襷張りとして如何にも大舞臺であつた、廣七の糸は音色が優しいやうで極る處はキツパリと極り素人の太夫さんには如何にも語りよきやうに見ゆる、猪當夜のドツサリは巴勝君の堀川猿廻し、餘り世間へ開けてはならぬが素人仲間では一騎當千の雄將である、聲振は艶もドスも利き、咽喉の工合が如何にもよい、興次郎の言葉も輕し、お後のサワリも婀娜な處がある、餘り公開の席へ出られぬので知る人は少ないが技倆は慥かに一方の旗頭であ

(金太樓)

京都素義界の光榮

なかまやしなふ
 岡山 大演習よりの御歸途京都市河原町御
 別邸に御逗留留置ばされたる伏見宮殿下に
 は御旅中の御慰みにある夜のこの數年前
 より御別邸に出入りする京都の素人淨瑠璃
 伊藤染い、大谷文賀、加田皆入の三人及
 び三味線彈竹澤宗六を召し玉ひて各々
 得意の事を語るやう仰せ玉ひしゆゑ四
 人は恐懼一方ならざるも御意に背くこと
 もならねば染いは野郎、文賀は布引の四
 すがは毛谷かを語り、宗八はこれが縁を
 勤めたに殿下は御耳を傾け玉ひしのみか

ときんしゆ　な　たまひ御満足に御思召さ
時々拍手(を)　な　玉ひ御満足に御思召さ
れたるが尙最終に何の三人掛合(を)のものな
か　こゝろ　な　そのだものせんくすそ
語れど事に何彼ぞ其演じ物の選擇の末
つひせんにやのはりかけあひ　その
遂に千兩掛けを掛合に染いのおさわ、文
賀の鐵々獄、菅八の稻川にて宗六絲を勤
めたるに非常の御喜び殊に宗六が矢倉太
鼓の曲彈を爲したるに盛に御囀奏遊ばは
れて四人に對し夫々御酒肴を賜はりしの
みけ染い、文賀が菅入の三人に拾五圓宗
六に二拾圓を賜はり尙菅入には特に銀籠
目の巻煙草入一個を與へられたれば一同
は無上の光榮なりとて退出したといふ
ことだ。

ほんし
本誌にその

じれき、んき、にんぎょう、わんさく、つら
 事歴を連載せる人形、淨瑠璃、元祖上村
 のんじょう、しない、ではんねん、こきやう
 源之丞一座は、市内九條榮座で興行し
 てなる。ふじにつき、なんたけ、こはなだ、だいふ
 双子日記三節目、竹本大海太夫の
 かりと、だん、なけ、ふく、ふく、ふく
 ハリのよい語口と、四節目の竹本呂關太
 いふだい、わりんおはせあつ、べんきやう、はし、このころ、こころ
 夫の大車輪、大汗水の勉強には拍手の聲

たか、中狂言しろきやしろきだいたいじやうひん
 も高く、中狂言白木屋の錦木太夫、上品
 なた、おほう、に詣つて大受けであつた、切狂言の太十
 は堀江座の大島太夫で、すでに定評のあ
 へい、こうしや、平も巧者であるに人身形は際立つてよくつ
 かつた。去八日から前を東鏡富士の巻
 狩、中な桂川連理櫓帯屋の段及び先
 代秋御殿、奥な壺坂、大切を朝顔日記、總
 掛合さ改めて、一座一層の大勉強をする
 さうである。

にひがたかいりやうぎ
新潟改良座の大景氣
だいけいき

窓の戸の隙も風の身にしむ此頃、雪を
や羽ぶける三越路から、一ひらの雁のは
きは編幗室に舞ひ込んだ。それは竹本
伊達太夫一行の菊濁吹良座に於ける大人
氣の知らずであつた。初日以來満員の好
景氣で、一座はふらふら意氣込みで、日延
の相談を持ちこまれ、加ふるに信州飯田

らは是ぜが非ひでも來きてくれこの鯨しやちこは子張こはつて
よこはまきらくさ
やくそく

聞かぬのを、横濱喜樂座からも約束があるし、十二三日には入京の筈だからさて
にち にふきやうはす
 謝絶したさいふ素ばらしい有様であるさ
しやぜつ す ありさま
 うな。

昔から大阪は節季を恐がる處さ、あなが
 人の惡口でもあるまい。しはす 師走の寒空はな、さむそら
 迎へ、いん 迎へる準備に誰も彼も忙し、いん 引
 かへ、きやうこ 京都の劇界は例年の例に依つて振
 つてなる。先づきよは 雁梅大一座の乗込に、のりこみ 南
 座は顔見世の吉例に人氣素張らしきもの、かほみせ
 座は顔見世の吉例に人氣素張らしきもの、かほみせ
 明治座は高田、河合の新派例になき顔見世、かほみせ
 竹矢來の意氣張い、さまし、い 歌舞伎座
 の雁童柳珊瑚の青年一座は荒五郎の老熟、やうじゆう
 を加へて、新派書おろしの外題、高野義人
 と銘うつて、花々しい對抗戦をやつてな、
 る。又國華座は川上一座の狂言、軍人氣貫
 ち、此處舊都百花爛漫の乾坤である。

かうべみかげんげいこ
神戸中檢藝妓

あうしふわいんげつたてきさうおんしんしやう
驚集會は先月大黒座に於て秋季溫習會
を開會した際外國人の看客多く頗る
好評を博したので本月六七の兩日元居
留地劇場を借入れ知事、裁判所長、其
かうごうのよよくてりやうじやうわいじん
高等官及び各國領事、居留外人、紳
士紳商を請待して溫習會を開催した、
の出し物は、

(總出)

なごであつたさうな。

湧わくが如ごとき

人気にて迎へられた姫路検査南陽社の
 温習大合は五日午後一時より山陽座に
 て開演したさうで其番組左の如し。

壽三番曳引拔唐人、四方の詩、今樣鶴龜
須磨の浦、六の玉川、曾我對面、菊のほ
れ、頼光松竹梅、今樣小鍛冶、鞘當引拔
神下し、隅田川。

江州遊廓新年のお座附

おほつかしはやまらさうじんちやうかまふぐん はんらやう
大津上柴屋町同甚七町蒲生郡八幡町
かくいうくのお らいしゆん おぞつ
の各遊廊に於ける來春の御座附きは左
の如し。

上柴遊廊

歳二つ、結ぶ氷に照る月の、光りもひ
 なる心地して、白むは花か、將た雪ひ、
 仰ぐお空ほんのりさ、有米の匂ひに、
 霞みつゝ、あれ鶏うたふ初日の出。
 稲荷新地八幡遊廓

會員消息

○賛助員竹本錦太夫は天下茶屋に移居
○發起人中村雁次郎丈は中座興行を去月

二十三日打上げその後引續き稽古に取
掛り京都南座に乘込めり

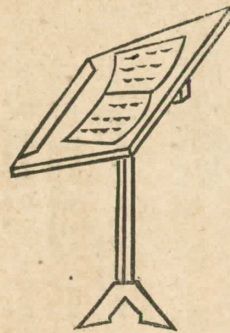
○評議員角田勤一郎氏東北の旅を終へ
一旦歸阪再び去月下旬旅程に上られた
り

○本會長土居通夫氏は去月中旬歸阪更に
下旬上京

○賛助員竹本春子太夫豐澤新左衛門一行
は去月二十九日徳山へ向け巡業の爲出
十四日歸阪

○同竹本伊達太夫同竹本錦太夫同豐澤團
平一行は去月二十五日巡業の爲越後路
へ出發

○會員吉見當百氏は藤田と改姓



▲一月號豫告▼

大阪と淨瑠璃(齋藤溪舟)近松曲稽古日記(細川鶴
聲)近松の事蹟について(幸田成友)淨曲の對句に
ついて(小野棣華)長尾太夫自傳(竹本春子太夫)

以上の外、奇抜なる口畫挿畫を掲げ、饗庭篁村、藤
井乙男等の諸氏に囑せる什を載せ、緒方博士は更
に題を改めて縱横論談を試みらるべく、青瑠璃漢
氏は安宅關の外に近松物を解釋し、淨曲辭解をも
爲すべく、本郷貞雄氏の朝顔日記講演を加へ、近
松翁の鸚鵡が柚の自序は古錦囊にをさめられ、
淨瑠璃絶句、同語呂合、素義界評言等益々趣味ある
ものを蒐録せんことを。

追て一月分に登載すべき廣告は可成本月中に申込
ありたし。

悪婆お源内より文珠門前成相觀音

御利益の段

打寄せる。渚は與謝の入海や。丹後宮津の町外れ。軒端傾ぶくあばら家に。ふさはしからぬ爪音は。優
しい娘が母親と。夫を貢の種ぞとは哀にも。また殊勝なれ。近所づからの教へ子を。いなせてお袖は琴
片附け。一間の障子をそつと明け。作次郎さん。お前毎日喧しからう。モウ娘子達も歸り。かゝさんも
まだ戻りはなさるまい。其留守の間が夫婦の樂しみ。マアこゝへと後から。抱きかゝゆれば作次郎。い
ざりながらに一間を出で。コレお袖。去年の秋から此業病。腰膝立たぬ私への貞節。榮耀の爲めに覺わ
た琴も。今では生活の種になる。そなたの心根。思ひやる程不便やと涙含めば。ア、コレ。私が琴を教
へるのも。お前を貢の爲め計りではない。つれなうても親への孝行。其私の氣も知らず。道に外れたか
ゝさんの行狀。モ私しやお前に氣の毒と。云ふを打消し。そりや何を云やるぞいのう。不思議の縁で夫
婦となり。今では此家へ入婿同然。そなたの親は私にも親。其始がそなたや此身に。辛う當るも無理
はない。如何に娘の婿ちやと云ふて。此壁には愛想もつきやう。其不具者をば夫と思ひ。抱きかゝへて
のこなたの看病。死んでも忘れぬ嬉しいぞやと。手を合せば。ア、コレ何のお禮に及びませう。夫と云
ふも勿體ない。お前はお主の若旦那。今更いふではなけれども。一昨年春櫻時。初のお目見に奥様の

お望みなされた琴の調べ。モ恥かしいやら嬉しいやら。躊躇傍からお前の口添へ。可愛いとなど弾いて見よと。ツイ仰しやつた可愛いとが。身に染々と初恋の。何に弾いたやら謠ふたやら。絲より亂れし私心。筆に云はせて書送る。墨も濃字のいろは假名。かなへてやるそのお返事を。肌身に添へて片時も忘れぬ此身の願ひがかなひ。二人斯うして居るならば。貧しい暮しも何のその。たとへ深山の奥の奥。月洩る伏家も厭ひはせぬと。身を摺寄せて目に涙。濡るも戀の慣ひぞや。牛は牛連れ丑松と。運立歸る主のお源。我家の軒に佇みて。小聲で何やら叫ば。打點首で丑松は。裏の方へと忍び行く。跡にお源は戸口に身を寄せ。内の様子を窺ひ居る。とは知らずして作次郎。武家の掟を破りし醜行。そなたは追放私は勘當。さて頼寄るべき所もなく。大小捨て町人ど。なりふりかへて遙々と。此宮津へ来てそなたの家に身を寄せたのは。去年の五月。其當座はお源殿にも。彼程邪慳ではなかつたが。月日の經つに従ふて。苛い無情いなされ方。今日は出やうか。明日は出やうと思へども。縁の絆にからまれて。一日々々と延びる中。フトした風邪の心地から。腰の痛みが彌増り。遂には壁となり果しより。愈々つのる老母の慳貪。ア、夫れも其筈壹錢の。働かさへも出来ぬ此身。娑婆塞げとは私がごと。寧ろ死んだらそなたの苦勞も。此身の苦思も助からうと。立たぬ膝ぶし握り詰め嘆く夫の心根を。思ひやる程悲しさの。胸に突かけせぐり来る。涙吞込み吞込んで。ア、コレ。其難病も。成相の觀音様へ立願籠めて本腹をお願ひ申してある程に。ツイいんまの間に癒りませうと。口には云へど。百日の。満願の日に此有様。神

や佛の力にも。及ばぬ事かとかこち泣。夫婦手に手を取交し。暫し言葉もなかりしが。お袖は最前忠作の情けの車を思ひ出し。先刻にも話した通り。忠作さんから貰ふた車。彼れにお前を乗せまして。せめてお山の麓まで挽いて往て。ども／＼に參詣をする私が心。モウきな／＼と思はずと。俱に信心して下さんせ。イヤモウ。唯さへ秋の物悲しいのに。愚痴の涙をこぼしてのけた。アハ、ハ、オホ、ハ、ハ。氣紛らしにコレお袖。久しう弾かぬ橋立の曲。今日は私に聞かせてたも。何を云はしやんすやら。毎日々々弾く琴を。サイノ。娘子達の稽古なら。聞飽きもするであらうが。飽かぬは秘曲の天の橋立。ありや百人一首で人も知る。小式部の内侍が和歌。面白い手が附いてある。そなたが屋敷に居る時に。弾いたのを聞いたまゝ。弾いて聞かしやと。只管に。望み掛けられアイ／＼と。夫に心つくし琴。調べよどまぬ次山の。流れも清き一ト奏で。大江山いくの、道は遠けれどまだふみも見ぬ天の橋立。音も澄み渡る一曲。の終ると共に入口がらり。ぬつと入来る母親の。顔見てびつくり琴片付け。オ、かゝさん戻りやしやんしたか。オお袋お歸りなさりませ。と手持不沙汰の挨拶に。日が暮れかゝつてあるに灯も點さず。面白さうにコロリン／＼。ア、申し。面白さうではござんせぬ。今日忠作さんに逢ふた時。娘御のお花さんに。橋立の歌を教へて呉れと頼まれたれど。餘り久しう弾かぬので。今ちよつとおさらへをして居た處。マアそんな事はどうでも宜い。コレ娘。マア喜んでたも。今日のまた運のよさ。出る賽の目が思ふ壺。お底げで財布も此通りぢや。其祝ひに作次郎殿へ酒を一口ふるまひ度い。こなた太義ながら

一走り。酒屋まで往て來てたも。といつになき母の機嫌は底氣味悪く。手をもぢ／＼立兼ぬる。作次郎も心ならねど。日頃の氣質逆らうてはと目で知らせ。ア、コレ。お袋の仰しやる事。ちやつと酒屋へ往ておじやと。云ふ間にお源は財布の紐。とく／＼取出す一歩銀。角の取れたる今日の仕誼。様子あらんと思へども。お袖は袖に酒德利。隠して酒屋へ急ぎ行く。お源は行燈取出し。點す灯影も薄暗き庭に下り立入口のかけ金内より。確乎と掛け。コレ婿殿。嘘を吐いて娘を追出し。酒屋へ遣つた其留守の間にチトこなたへ頼みがある。が何と聞いて下されぬかと。猫撫聲。作次郎は不審顔。お袖の縁で長々の御厄介。其私にお頼みとは。外の事でもござらぬ。チト急に金の入用。こなたも今でこそ。落ぶれて居さつしやるが。以前は隣國出石の御家中。結城作左衛門様の御二男。武士のたしなみ懷中に。貯への金があらう。其の金を何卒此婆に貸して下されど。思ひも寄らぬ雜題に。ハツと思へど。アハ、ハ、ハ。御元談仰しやりますな。尤も屋敷を立退く時には。少々金子を持居たれど。夫れもお前に。イヤサお前さまの仰しやる事。有さへすれば差上げませう。すりや金は無いと云ふのか。ハイ金より外の事なれば。外の事なら聞くぢやまで。マア仰しやつて見て下されませ。斯う云ふ事もあらうかと。外の思案もしてあるのぢや。コレ作次郎殿。暇狀を書いて下され。エ、ハ。お袖と縁を斷つたと云ふ。三下り半を今此處で。何ぢや、何を恠り。其面は何ぢや。合せものは離れもの。きり／＼去り狀書いた上で。己れも此家を出て行きおれど。早やそろ／＼と地金の惡口。ア、申し。何がお氣に障りしか。飽も倦れもせぬ

中の。お袖に去り狀が書かれませうか。また出て行けと仰しやつても。歩行もならぬ此身の不具。何ぢや。飽きも倦れもせぬ中ぢや。オホ、ハ、ハ。爾うであらう。娘の中はさうであらうが。此親が飽き果た。倦いたこなたを抛出して。金の有る好い婿取つて。左團扇の樂隠居。素寒貧のこなたに飽いて。親の威光で縁切らすのぢや。夫れが嫌なら其懷中に。くすねてある臍栗金。こゝへ出しや。私の懷中に金と云ふては。イ、ハ。無いとは云はさぬ。日頃から大切にらう。肌身放さぬコレ此胴卷。ア、申し。これは金ではござりませぬ。お袖が私の病氣を治さう爲め。受けて來た觀音様の御守。何ぢや。御守ぢや。ドレ。檢めてと作次郎が。支へる手先きを拂ひ退け、引出したる木綿の胴卷。罰は其身に當るども。白紙包みの守札。手早に取出し見て恠り。ヤ、こりや矢張り守札。エ、忌々しいと。腹立つまゝに引裂き／＼投棄て。破れかぶれの其所へ。蟲が知らずか酒屋から。歸るお袖が急ぎ足。我家の門口戸に掛金。合點ゆかじと叩けど。いらへなければ戸の隙間より。覗けば内には母親が。作次郎の襟髪掴んで。情け容赦もあらくれ聲。大川に水絶すと。元が元ゆゑまだ懷中には。私に隠して三三兩。持つて居ると思ひの外。鑑一文もないからは。愈々此家にはモウ置かれぬ。サア出て失せう出て行けど。拳を固めて滅多打。外にはお袖が身も世もあられず。コレか、さん何の科で其様に。コレ此處明けて。と氣を焦る。作次郎も口惜しさに。手向ひせんにも女房の親。親と云ふ字に兩手を縛られ。じつと堪ゆる無念泣。お源は尙ほも圖に乗つて。オ、口惜しいか。是程にしても手出しをせぬとは。云はうやうない大腰抜けサ

ア出て行けど。また打擲。お袖も今は堪り兼ね。打叩き／＼碎けよ。割れよと我身をしづ。門の戸めり／＼打破り。其儘駈入り母親に。えがみ附いておろ／＼聲。エ、お前はなア／＼。夫と云へど私の爲めには。大事の／＼お主様。何科あつて此折檻。と云ひつゝ傍に落散つたる。御札の破れを手に取上げ。ヤア此御札を誰が破つた。オ、私が引裂いた。コレお袖。錢札の代りにもならぬものを。大切さうに持つて居るゆゑ。己りや金と思ひ込んで。今日まで璧を婿あつかひ。可愛がつて居たけれども。金の切目が縁の切目。此奴を抛出し。こなたには跡で好い婿を取つてやる。璧が居ては面倒ゆゑ。暇狀書かして追出すのぢや。エ、そりやマア何を云はしやんす。コレ作次郎さん。必ず／＼り狀書いて下さんすなへ。コレか、さん。去年若旦那のお供をして此宮津へ歸つたときに。お前は何と云はしやんした。オ、好い婿を取つた。其マア怖い顔にこ／＼として。喜びやしやんしたではないか。二年とたゝぬ其中に。お前は御恩を忘れてか。三世の縁を二世にかへ。堅い約束した中を。どうして縁が切られうぞ。其大切な夫の病氣。治さう爲めに成相の。觀音様へ立願かけ。受けた御札を勿體ない。引裂きやしやんした其時に。能うマア其手がエ、マ折れなんだ。佛の御罰おそろしい。と思はぬお前は隣國の。大江の山に住みしと聞く。鬼か鬼神か恨めしやと。散亂したる觀音の。御守札を拾ひ上げ。繼ぎ合せ／＼。一心不亂佛に謝罪。作次郎も妻の貞節。思ひやる程我身の不幸。悔むに餘る目に涙。夫婦が涙はら／＼。落て流れて金引の。瀧水増る許りなり。さしも非道の母親も。我子の有様つく／＼見て。ア、誤つた／＼。惡

かつた／＼。娘許してたも。婿殿も堪忍して下され。今後すつかり心を改め。酒も吞むまい博奕もやめる。まだ夫ればかりぢやない。お袖を見習ひ。觀音様を信心する。ア、勿體ない／＼。南無大慈大悲の觀音様。婆が罪障消滅をなさしめたまへ。觀音様と。其内心は白髮頭。疊に摺付け詫び居たる。お袖は嬉しさ又涙。其お心にならしやんしたら。謝罪の爲めに此御守を。お前が持つて觀音様へと。手渡しすれば押戴き。明日は早々參詣しませう。お前はかね／＼觀音堂で。お通夜がしたいと云ふて居やつた。今宵は秋の最中の月。幸ひ貰ふた彼の車へ。婿殿を乗せて女夫連立。所詮お山へは登られまいが。心床しに切戸へ行き。文珠の御門を成相寺の。御本堂になぞらへて。心置きなうお通夜をしや。私も内の締りをして。跡から往つて共々に。御詠歌なりとも唱へませう。オ、嬉しや／＼。其御許しの出た上は。私が豫ての望み通り。夫と共にお通夜をして。一日なりとも此難病を。早う治して戴きたい。申し作次郎さん。お前は車へサア早うと。甲斐々々しくも抱きかゝへ。お源も共に手傳ふて。漸う乗せし璧車。いざやとお袖が挽き出す。夫も車に法の道。月をよすがに磯傳ひ。切戸の方へ挽いて行く。様子見届け奥の間より。ぬつくり出たる丑松が。モウ出やうか／＼と思ふ中に。思ひも寄らぬ此方の改心。サイヤイ。そこが臨機應變ぢや、此家で婿めをばらして呉れと。お前に頼んで置いたれど。如何も此處では跡が面倒。發心したと見せかけて。安心させて女夫ながら。文珠の御門まで遣つたのは。コレ丑松。ちよつと耳を貸しや。ソレ斯う。斯うぢやと呟やけば。ウ、成程。時刻を計つて璧めを。コレ大きな聲をす

るないやい。壁ど侮り不覺を取るなよ。オ、合點ぢや宵の間は。いつもの賭場で。明けの七ツの鐘を合圖に。私も加勢に出掛けるぞやと。尙ほも二人は密々と。牒し合せて丑松は。彼處をさして。三重走り行く。名に高き日本三景の其一ツ。天の橋立の奇勝と云つば。右も左も碧海の。其真中は三十餘町。白砂の中に女男の松。緑りの色も長へ幾世替らぬ大長洲。渡し隔てゝ九世戸の文珠。今は切戸と名にしろき。菩薩の御堂も秋の夜の。さやけき月の影澄て。書をあざむく眺めなり。折しも彼方の砂道を。かよわきお袖がかた手綱。女方にやう／＼と。御門間近く挽き寄せて。作次郎さん。女の私が挽く車嘸辛氣な事でござんせう。何の／＼。近いと云ふても半道餘り。私を乗せて挽く車。定めて手も足も疲れたであらう。其苦しみも皆我業。許してたもと詫ければ。ア、モウ／＼其様な事云はしやんすな。觀音様のお庇げで。かゝさんの心も改まり。わたしやモウ日本晴がしたやうで嬉しうござんす。晴れたと云へば此マアよいお月様。むら雲の邪魔もなく。今夜は此處を成相山の。觀音堂ぢやと假りに定め。御詠歌となへてお通夜をしませう。シタが秋の夜寒むに。風ひかせてはと夫思ひ。妻乞ふ鹿の聲ならで。千草にすだく蟲の音もいと哀れを添へにける。ア、コレ／＼。大分に夜も更けて来た。二人一緒に御詠歌をと彼方に向ひ合掌し。詠歌な。浪の音松の響きも成相に風吹き渡る天の橋立。繰返し繰返す。詠歌に時をも移しける。早や丑滿のかねてより。御門の小影に身を寄せて。時刻はかりし丑松が。そつと立出で忍び足窺ひ寄つたる車の後ろ。作次郎夫れと心附き。ヤア。こなたは。オ、丑松ぢや汝の命を貰はうと。宵の

内から待つて居た。觀念せよと。懷中の。懷劍取出し斬り掛れば。お袖は胸り作次郎は。身をかはして丑松が。刀持つ手をグツと捉へ。すでんどうと傍へに投付け。理由をも云はず理不盡に。此狼藉はナ、何の爲め。コレお袖。必ず油斷せまいぞと。心を附くる其處へ。いきせき馳せ來るお源婆。娘は夫れと見。オ、かゝさん。お前もお通夜に來やしやんしたか。丑松めが作次郎さんを。ウフ、斬り損なうたか甲斐性なしめと。云ふ間に丑松起き上り。アイタ、ハ、婆さん。思つたよりは手強い壁め。其筈ぢや以前はレコを知らぬのか。己れが代つて療治をするぞ用意の刃物を取らせば。お袖は驚き其手に絶り。コレかゝさん。お前は宵に改心を。嘘ぢや／＼。嘘ぢやわやい。改心と見せたのは。壁を此處へ釣出して生命を取らう其爲めぢや。サア覺悟せよ。作次郎と。又振上ればまた絶り。エ、コレかゝさん。餘りぢや／＼。餘りぢやわいなア。六十過ぎた身をもつて。後生を願ふ心もなく。娘の婿を殺さうとは。お前は何たる惡魔ぞや。何卒心をひるがへし。眞人間になつてたべ。夫の命が欲しいなら。私を代りに今此處で。斫りさいなんで下さんせと。身を摺付けて恨み泣。理りせめて哀れなり。エ、面倒など母親は娘を突退けコレ丑松。掛け／＼と氣を焦る。オ、合點と性懲なく。二人が一度に立かゝる。時に不思議や清光の。月は忽ち雲に隠れ。俄かに四邊は眞暗がり。車軸を流す雨諸共。天地を動かす大雷。ごろごろびつしやり落たる中に七轉八倒丑松は。虚空擱んで死してけり。跡の三人も打倒れ。人事は更になかりしが。空も次第に晴れ渡り。松の梢の雨雫。口に入りしかお袖はウンと。正氣つく／＼四邊を眺め

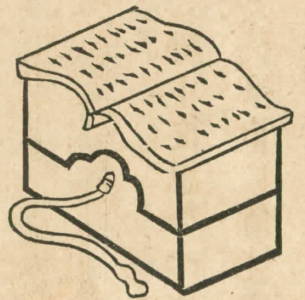
彼方に斃れし丑松が。無惨の最期に驚きながら。夫の傍に駆け寄つて。作次郎さん。我夫のうと呼ぶ聲の。耳に通じて。ウンと一聲。すつくりと。立上つたる夫の有様。見るよりお袖はまた恟り。ヤア／＼お前は足が立つたぞへ。云はれて始めて心付き。オ、足が立つた。有難や有難や。立つた／＼と嬉しさの。餘りに支股を踏鳴し。そんなら今のは正夢か。エ、お前は今の雷に。オ、雷鳴に正氣を失なひ悶絶したる其間に。まぎ／＼蒙る菩薩の御告。病ひの平癒もそなたの願望。納受あつたる佛の功力。シテお源殿には。オ、お前の足の立つた嬉しさ。ツイ忘れて居た。かゝさんも矢張り彼處に氣絶して。エ、母を打捨て置くとは不孝。ソレ。氣を注げてと夫婦が立寄り。ゆり起し揺起せば。お源は漸う兩眼見開き。苦しき息をつきながら。今のは夢であつたか。ア、冥加なや有難やと。理由も云はずに打喜ぶ二人は更に合點ゆかず。コレか、さん。冥加なや有難やとは。オ、合點がゆくまい。コレ娘。婿殿も聞いて下され。今この婆は夢ともなく。現ともなくあり／＼と。成相の觀世音の。お姿を拜んだわいのうナ、何と仰しやる。サア靈夢の中に此身へ御教化。作りし罪も娘のお袖が。信心の徳に免じて。罪障消滅させてやらうと。有難い御告であつた。アレ／＼丑松が彼の最期も。觀音様の御罰であらう。夫れにつけても最前の。御札へせめて今此處で。謝罪をせうと悔悟の念の帶の間より取出したる。紙の包みを開き見れば。コハ抑も如何にコハいかに。破れし御影はもと／＼に。なれ合ひたまふ御尊像。不思議なりける次第なり。上人小影を立出たまひ。ハア、善哉々々。計らず來り。始終の様子は彼れにて聞く。

懺悔に滅する汝が罪。尙ほも信心怠たるなど。仰せに三人は有難涙。かゝる奇瑞に誠の發心。お源は末も長からぬ。白髪の髻ふつと切り。亡き我夫と今目前。無惨に死したる丑松の。菩提の爲めに尼となり。西國三十三所の。靈地をいでや巡らんと。世はうし松の亡骸を。壁車にかき乗せて。弘誓の船にあらねども。海へさんぶり流れ灌頂。早や曉の鶏の聲。東天こう／＼孝貞の。道は一筋龍燈の。松に輝く朝日影。式部櫻も武士の。昔にかへる心地して。今は涙の磯もなく。鶏塚の羽たゞきや。赤き心の赤石も。過ぎて我家へ犬の堂。煩惱の夢今覺めて。五逆消滅自他平等。佛の功德末の世に。觀音薩埵の靈驗を。語り傳ふを尊とけれ。

第二回



お上人形



富樫とがしかされて。ノウく客僧きやくそう。我われ幼少ねうせうの頃ころより佛陀ぶつだに帰依きよゐし候さふらふ。未だ先達せんだちの如ごとき名僧めいそうに逢あはさるゆゑ。修験しゆげんの法はふの委細みさいを知らず。今我尋ぬる趣おもむきを一々いちくお答こたへ下くだされうや。

富樫とがしの間まふ所明白ところめいはくで、何等なにかのむづかしい語句ごくはない。佛陀ぶつだは釋尊しやくそんのこと、先達せんだちは前に解かいして置おいた。ホ、いしくも問とはれし關主殿せきぬしどの。愚僧ぐそうも心得こころえぬるか。どは殘のこらずお答こたへ申まをすべし。

いしくもは、善くもといふ意。

ホ、早速さそくの御承知過分ごしょうちくわぶんに存ぞんずる。さらばお尋ね申たづねまをすべし。

過分かぶんはかたじけないと云ふこと。

然らば御答ごこたへ仕らんこ。たゞひに形あらたむれば。義經主從息よしつねしゆじゆうちきをつめ様子やうすいかゞ守り居る。富樫膝とがしひざを進すすませて。イカニ先達せんだち。抑世おさへに佛徒ぶつだの

姿種々ある中に、山伏達の異形の姿はいかなる子細に候ぞ。

佛徒は佛教徒の事である。異形の姿は山伏が他の僧侶と、其姿を異にしてをるからのこと。

夫修験の法といつば、胎藏金剛兩部の旨を修し、嶮山惡所を踏開き、世

に害をなす惡獸毒蛇を退治して難行苦行の功を積み、惡靈亡魂を得脱

成佛させ、天下泰平の祈禱を修す。

胎藏金剛兩部は、胎藏界と、金剛界とで、佛道の兩面で、胎は暗黒界即ち裏面、金は光明界即ち表面とでも見ればよい。つまり暗明兩道のことである。

惡靈は怨靈のあやまりであらう、人の怨念のこと、亡魂は死んだもの、魂である。難行苦行は修行に艱難苦勞を積みこき、退治は殺し除くこと、嶮山はけしき山、惡所は道なき所である。これは前後した。得脱は得道解脱のこと。

表は強魔の相をあらはし、惡鬼外道を降伏さす。是佛の兩部にして、百八のいら高珠數に、佛跡の利益を顯はす。

強魔はつよき魔の如き相のこと。外道は彼の正道になき天狗魔神の如きもの。野山高僧傳に釋覺海

天狗となり、外道を修すとある。百八のいら高の珠數は、百八顆のいら、即縁の高い珠數のこと。

ム、シテ又袈裟を身にまこひ佛徒の姿に有なむら頭に頂く兜巾はいかに。

兜巾は山伏の額に當てるもので、十二のひだがある。そして紐をつけて、おどがひで結ぶのである。

ホ、則ち兜巾は五智の寶冠にして、武士の兜に等しく。十二因縁のひだをすべて是を頂く。

五智の寶冠、五智とは、一に法界體性智、二に大圓鏡智、三に平等性智、四に妙觀察智、五に成所作智、この五つの形を表せる寶冠との意。

十二因縁とは、一に無明、二に行、三に識、四に名色、五に六入、六に觸、七に受、八に愛、九に所有、十に生、十一に老、十二に死、この煩惱十二因縁を兜巾の襞に表したのだ。

シテすかけの因縁は、是ぞ九會まんだらを表はす。黒き脚半は、胎藏界の黒色なり。

九會曼陀羅は、一に一印會、二に理趣會、三に降三世會、四に降三世三昧會、五に成身會、六に羯磨

會、七に微細會、八に供養會、九に四印會である。曼陀羅は輪圓具足の義にて、無缺の意。胎藏界前に説き置いた。

八ツ目の草鞋は。八葉の蓮華を踏にかたどる。

ハツ目草鞋は、一足に乳のハツ有るもの、八枚の蓮華に象つたのである。

シテ山伏の出立は。則ち其身を不動明王の尊體にかたどるなり。出入息は。あうんの二字。

あうんは亞云にて、陰陽のこと、口を開けば、ア音を發し、口を閉づればウン音を發す。此二字は佛道の尊ぶ所、字母の本である。又阿阡ども書く。

ム、拟又寺僧は錫杖を携ゆるに。山伏衝念の金剛杖に五體を堅むるいはれは何ぞ。

山伏衝念とは、山伏の專念に修行すること。即ち道を一心に念するのであるから。衝念ども、專念とも云ふのである。携ゆるは携ふるにはであらう。

事もおろかや。金剛杖は天竺檀特山の神人阿羅々仙の持ち玉ひし靈杖

にて。胎金兩部の功德を籠たり。

天竺檀特山の神人は、仙人で阿羅々仙は、釋迦の師匠である。迦毘羅城淨梵大王の世子たる身を以て一朝發心して檀特山に上り、この仙人に師事して、大聖釋迦と成つた、悉太その人は、兒女もよく聞き知つてをらう。

釋尊いまだ瞿曇沙彌と申せし時。阿羅々仙の給仕して。難行功を積み。

御名も照普比丘と改めて。此金剛杖を授り玉ふ。かゝる靈杖なればこそ。吾祖先役の小角。是を用ゐて山野を経歴し玉ふなり。

金剛杖の因由來歴、説き得て痛快、げに學僧ならずしていかでかよくすべき。勇僧ならではいかでかよくすべき。辨慶の智勇、此の一段に於て遺憾なく發揮せられてをる。經歷し玉ふなりはなれと結ぶべき所だ。又申せしは申しとあるべきだ。

又杖に切目を入たるは。地水火風空木火土金水をかたどつたり。

これは本文の通りであつて、別に註解を要するまでもなく分つて居らう。

シテく佛門に有なむら。帶せし太刀は只物ををどさん爲なりや。誠

に害せん爲なりや。是にもいはれ有やいかに。

このくだりもよくわかつてをる。

ホ、是ぞ柴打と號し。我中興の聖人大峰山に入し時深山幽谷を切開き御山に住む毒蛇を退治成佛させたる其功德又王法佛法に害をなす者は一殺多生の利に依て忽切て捨つるなり。

柴打は山伏の刀のこと。我中興云々は、修驗道中興の祖で、役小角のこと。王法は帝王の國を治むる法である。一殺多生は小の蟲を殺して、大の蟲を助けるといふ理で、つまり一人の惡者を殺しても多數の良民を助けるといふことである。

ム、眼に遮り形有ものは切にもせよ。若形なき陰鬼妖魔が王法佛法に障碍なす時は。何を以て切たまふや。

眼に見わるものは切る事も出来るが、幽霊や化物はどうして切られるのか、障碍はさまざま、又さばりである。

ホ、無形の陰鬼妖魔は九字の眞言を以て切斷せん。

創刊滿五年

東京正論

毎月一回發行▲一部代價金六錢二十部前金
壹圓貳拾錢▲郵税不要▲廣告料一行十九字
詰金四拾錢▲注文は小爲替前金▲郵券代用
一割増

『正論』は忠君の大義博愛の至道を主張し社會を

して調和圓滿の福音を享受せしめんとする者也

●空論的危險的破壊的共産的の社會主義に反對
し社會改良政策を鼓吹するの中央機關紙也●今
や無政府主義者の大陰謀事件あるに際し曾て創
刊以來其害毒を天下に警告せし本紙は敵も味方
も一讀するを要す

東京市赤阪區檜町三番地

發行所 東京正論社

小生儀愛知縣下に於ける冬期小學校
教員講習會講師に聘せられ來る二十
四日より旅行仕候間自然歲末年首の
禮を缺くべく茲に謹告仕候

小野利教

追て地方會員諸氏に御詫び申上候は毎々御書
面に接しながら多忙の爲め其都度御返事致さ
いる向多く怠慢の罪偏に御宥恕の上今後とも
一層の御協力願上候儀に御座候

會告

延期に延期を重ねたる本會主催の素
人大淨瑠璃會は、目下他と交渉開始
中にて、更に來月に延期したり、會
員諸氏、尙其發表の日を待たれんこ
とを、茲に告白す。

近松會演藝部

當ル明治四十四年一月二日午前八時より
堀江市の側堀江座において

前、道中双六乗掛合羽伊賀越大序より
敵討まで

大序花見の段、和田鞠負屋敷の段、繩手の段、上杉館の段、會合の段、圓覺寺祝言
の段、澤井城五郎切腹の段、政右衛門屋敷の段、大廣間傳授の段、沼津里平作内の
段、新關の段、竹簾の段、岡崎の段、

中、夕霧 伊左衛門 廓文章

吉田屋座敷の段、

切、増補忠臣藏

本藏下屋敷の段、敵討の段、

以上一座大車輪にて開場仕候間賑々敷
御來場の程偏に奉希上候

座主 木津谷吉兵衛

寄稿種類

- 一、近松翁遺品と其の所藏家
 - 二、各地斯道團體の狀況
 - 三、各地淨瑠璃會の景況及び批評
 - 四、地方天狗連の氏名年齢調及び得意の語物と其の世評
 - 五、演藝に關する所感様のもの
 - 六、市内各座及び各地に於ける劇評
 - 七、古今斯道家の逸話と傳記類(失敗談成功談共)
 - 八、古今演劇に關する詩、歌、俳句、狂歌、情歌、謎、一口話、考物等
 - 九、古今斯道家の著作物遺墨類
 - 十、斯道に關する珍談奇話並に端書便り
(面白く手みじかに書きたるもの)
 - 十一、淨瑠璃文句中の質疑
 - 十二、斯道家斯道上に因める寫真類
 - 十三、其他古今ありとあらゆる事柄
- 右寄稿に對し價值あるものは相當の報酬を進呈

明治四十三年七月十六日内務省許可
明治四十三年十二月十八日印刷
明治四十三年十二月二十日發行

(毎月一回
二十日發行)

複製
不許

發行所 近松會事務所

大阪府北區會根崎上二丁目七十番ノ三
(電話東一八八七番)

編輯兼 小野辰太郎
發行人 大阪府北區會根崎上二丁目七十番ノ三
印刷人 辻 岩 雄
神戸市三之宮町一丁目三百二十番邸
印刷所 明 輝 社
神戸市三之宮町一丁目三百二十番邸

定價	賣捌元	廣告料	注意
一冊金拾五錢(郵税壹錢)(壹錢切手に限る) ◎一ヶ年誌料金壹圓五拾錢を拂込まるゝ人は會員となし本誌無料配付(郵税不要)の上種々の特權あり	大阪府北區東梅田町十九番地 盛文館書店	特別 壹頁 金貳拾圓 半頁 金拾貳圓 普通 同 金七圓 同 金四圓 ◎本誌廣告料は割引なし ◎本誌廣告料は割引なし ◎本誌廣告料は割引なし ◎本誌廣告料は割引なし	本誌は全國到る處の書籍雜誌店に有り 本誌廣告御望の方へは御報次事務員參上御承合可仕 候△本誌廣告べ切は毎月拾日限り



傾城阿波鳴門

又切

傾城阿波鳴門 又切

笈臺
奧

竹牛村之吏

第二集

[illegible]